

「版画家 西澤静男」

二九回生 大森 翠

一九五一年、六才になった春に母が幼稚園に行くよう勧めるのを断って「お絵描きに行く」と宣言したらしい。絵画教室は日曜日にしか無いからこれは筋の通らぬ話なのだが何故か親が折れて、五人兄妹のうち私だけが幼稚園に行っていない。そこから西澤静男先生と私のご縁が始まる。

毎週日曜日、隣のミー子ちゃん(尾崎美和子さん)と連れだつて豊津の教室に通った。アトリエのドアを開けると、そこには私の兄妹を含め近所のお兄さんお姉さんや友達など千里山中の子供が集まっているように感じたものだ。

買い食いを親から禁じられていたが、暑い夏には二人は豊津までの電車賃五円を浮かせて阪急の線路を歩き一本五円の硬いキャンデーを食べながら行った。往復とも歩いたこともある。子供の足で千里山から豊津まで歩くと先生のところに着く頃には教室は終わっている。「おはようございマース」汗まみれでドアを開けると先生と奥様が片付けの手を止めて「また今頃来たんかあ」と迎えてくださる。それ

からペチャクチャと女の子のおしゃべりをしながら、悠々と道具を広げ絵を描き始める。絵には何時間でも集中できた。

先生は昼食に母家へ行き、済ませてから私達の絵を見て「おう、ようでける。ほな片付けて帰りや」とおっしゃる。当時はまだ千里第二小学校に勤めて居られたから、先生にとって日曜はご自身の制作と休息の貴重な日であつたに違いない。翌年(五十二年)には小学校を辞められたので、私は千二小で先生に教わっていない。あれから制作一本の道に入られたのだろうか。教室で先生のお子さんの瑜伽史ちゃんやみえちゃんともよく遊んだが、今思うと彼らの教育費などもこれから要するという時期だったと思う。ポーンスカウトの活動も熱心しておられた。

そのような、心と経済のゆとりや制作のエネルギ―がどこにおありだったのだろうか。

私はこの絵画教室を小学校の何年生で辞めてしまったのか思い出せないが、西澤先生とのまたのご縁はここから一挙に二十五年先へ飛ぶ。

京都美大を卒業し油絵の研鑽に励んでいた私は、一九七八年フランス政府の国費留学三年を終えて帰国した。丁度その頃、先生から個展のご案内を頂い

た。先生は日本画家だと聞いていたのに会場にはすでに国際的評価を得た格調高い銅版画がずらりと並んでいて仰天した。二十五年あまりのご無沙汰の間に先生はご自分の領域を見つけられ、私は「お絵描きの先生」が大画家であることを知った。

ツヤツヤと光る真っ黒な頭髮と青みをおびた白い肌のコントラストは昔のまま、私はそこに芸術家に必要な若さと生臭い色気を感じとった。

先生の作品には、版画集「川端康成シリーズ」(スエーデン国王に献呈)、「文楽」(ジュネーブ、プチパレ永久保存)など傑作は枚挙にいとまがない。この再会の時期から私はまた先生に多くを学ぶことになる。

(話が逸れるが、阪急京都線の中で小学一年の時の担任の柳生先生を三十年ぶりにお見かけした。会釈する私の顔を先生は黙って三十秒ぐらい見つめ

『おおもり みどりちゃん!』と叫ばれた。

その時先生は大阪音大の音楽学理の教授だった。千里第二小学校で、私は立派な先生方に教わっていたのだなあとつくづく有難く思う。大学を退任された柳生先生は、今もご研究とご執筆に忙しくされている。)

に市展の審査員として市民の文化活動発展に微力をつくすようになった。先生の存在は美術家協会の中でもまた市展の審査員の中でもその作品、鑑識眼、人間性において際だっていた。したがって自然に先生が皆を引く張る立場におられた。だがその没後は、先生のそばでハエのように手をこすり合わせていた一部の人達が「文化」は二の次で既得の立場や権利を守ることにのみ汲々としはじめ、現状は実におもしろくない。西澤先生にはまだまだお元気で居てほしかったし、また何故もつと確かな人材を育てておいて下さらなかつたのかと恨みごとのひとつも言いたくなる。

「お絵描き教室」時代の先生の許からは、素晴らしきアーティストやディレクターが育ち全国で活躍なさっている。その皆さんに「千里山へ帰って来て!」と呼びかけたい。

我が家と兄のところには先生の個展の時に心ひかれて求めた傑作が数点ある。観る度に思う。「西澤静男」は現在もつとつと注目されてしかるべき作家である。

二〇〇九年四月

ヨーロッパを見てきた私に言わせると、日本では画家は一握りの人を除いてまだ市民権すら得ていないと思う。作品の鑑賞評価に至っては「観ようともしない、観る目もない」とグチをこぼしたくなる。

一九八〇年代には海外の評価が先行していた西澤先生を日本でも応援しようという人達がようやく現れた。先生の芸術に賭けられた人生が「実を結ぶ」「日が当たる」と私は嬉しかった。しかしバブル期に、先生の作品を理解もせず儲けに利用しただけの画商も居たろう。また応援に私情がからみ、先生を迷路に追い込んだ人も居たようだ。

一九九六年先生は突然逝ってしまった。作品の評価が高まり、売れ行きが良くなると云うことと、先生の日々の幸せは、あるいは反比例したかも知れない。それでも先生には、世評の手応えを感じながらあふれるように制作された十年あまりがあった。芸術家はそれで十分なのかも知れないと思う。

私がお稽古に通っていた当時から、西澤先生は吹田美術家協会会員で吹田市展の審査員であった。私はその後三十年を経ても世間に疎くその協会や展覧会の存在を知らなかったが、八十年代初めに先生に誘われて仲間入りをし、先生の最後の十年はご一緒

筆者 略歴

1955年 千里山生まれ

1968年 京都市立美術大学洋画科卒

テキスタイルデザインや TVのCM・シヤルフィルム制作に従事した後、油絵に専念。

1975～1978 フランス政府の給費留学生として国立

ニース美術学校、国立パリ高等美術学校に学ぶ。

1978年 坂崎乙郎氏選による個展シリーズ「人間とは何か」(東京 紀伊国屋画廊)や

1982年 坂崎乙郎氏選「現代絵画の15人展」(東京 ラ・ポーラ画廊)に選ばれた他、

2003年「京都洋画の現在(85人の視点)」に出品など。

1972から現在まで、毎年 大阪、東京、神戸 などで画廊企画個展。

絵本、本の装画、教科書・雑誌のカットなど多数。独立行政法人理化学研究所が4mの油絵大作をコレクションしている。

1981～1996年 京都市立芸術大学講師

1996～2006年 京都造形芸術大学講師